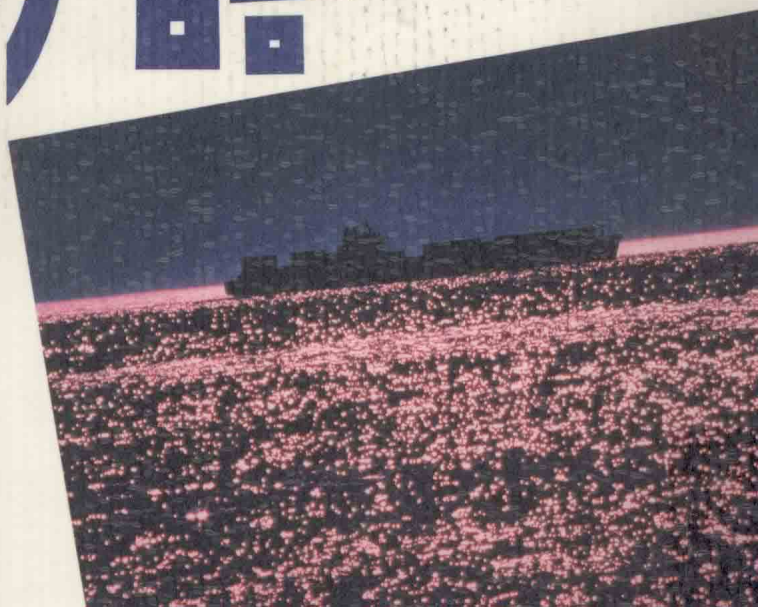


ビットン・ アイランド号 物語

ハレー彗星の下で

柳河勇馬



ヒットンアイランド号物語

ハレー彗星の下で

柳河勇馬

潮出版社

ピリトン・アイランド号物語

——ハレー彗星の下で

一九八八年八月二十日印刷

一九八八年九月五日発行

定価 一〇〇〇円

著者 柳河勇馬

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社潮出版社

東京都千代田区飯田橋三一一三 ☎ 102

電話 〇三—二三〇—〇七四一(販売部)

〇三—二三〇—一四六八(編集部)

本文印刷所 明和印刷

付物印刷所 栗田印刷

製本所 東京美術紙工

© Yama Yamagawa, Printed in Japan, 1988

落丁・乱丁本はお取替えいたします。販売窓口あて御郵送下さい。本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

ISBN 4-267-01190-7 C0095

著者略歴

本名・小山田正。大正14(1925)年、大分県生まれ。昭和20年、旧制高等商船学校専科航海科卒。昭和54年、第3回週刊読売ノンフィクション賞受賞。55年、第10回九州芸術祭文学賞佳作受賞。76年、第1回月刊プレイボーイドキュメントファイル賞受賞。大分県別府市在住。

ブリトン・アイランド号物語——ハレー彗星の下で●目次

第二章	船乗りたちの人間模様	23
第三章	ハレー彗星が見えた	37
第四章	赤道直下の恋	50
第五章	イスラム教のお祭	64
第六章	恥ずかしい日本人	77
第七章	下船などさせたくない	91
	第一章 空路で乗船	7

第八章 去る人、残る人 105

第九章 苦しい決断 120

第十章 チラチャップの街角 133

第十一章 天のノート 152

第十二章 ハレー彗星に乾杯を 172

第十三章 小さな絹のシヨール 186

装幀 平野甲賀

カバー写真 オリオンプレス

ブリトン・アイランド号物語――ハレー彗星の下で

第一章 空路で乗船

昭和六十一年四月中旬、ジャカルタ空港を飛び立って一時間ほどたつと、やっと体から汗が引いた。六十五人乗りの相当古いホッカF28型機で気密が保てぬらしく、飛び立つまではドアを閉めていても外気が入ってきて息苦しいほど暑かった。

三千メートルの高度まで上がり水平飛行に移ると、すぐ「ベルト着用」のサインが消えた。私は最前列左の窓際に座っている。国際線の飛行機にくらべると足を置くスペースが狭くて、それほど長くない私の足でさえ窮屈で気分が悪い。

私はふり返って機内の様子を見た。座席は七〇パーセントくらいが塞がっており、四、五人の白人以外はインドネシアの人々で占められているようだった。どの人の顔も仏像に似ており、深い静寂の中で、諦めることと逆らうことを隠しているように見えた。イスラム信徒独特の顔で、瘦せて眼光が異常に鋭い。

それから私は額を小窓に擦りつけて外を見た。青空に羊の群れのような白い雲があり、その下

は果てもなくつづく海である。ああ、この海がジャワ島とボルネオ島に挟まれたジャワ海だと思ふ。ジャワ海は縮緬状の海面がぬめるように広がっているのだが、青い空や白い雲があまりに鮮やかなので濃い藍色に汚れて見えた。

ジャワ海は明日からの私の職場である。そしてブリトン・アイランドというのはジャワ海に浮かぶ風景の美しい小島で私が明日から船長として乗船する十五万トンタンカーの名前である。だから少しでも美しい海を望んでいたのにこんなに汚なく見えるのは、何かよくないことが起こるのではあるまいかとしきりに悪い予感がする。

私は小窓から顔を離し目を閉じて、日本を出発してから一週間以上もかかった長い旅を思った。私の頭の中で出発前夜一泊した東京のホテル、成田空港からジャカルタ空港までの八時間におよぶ空の旅、それからイスラム教のお祭で五日間も足留めをくったジャカルタのホテル等が次々に頭に浮かんで消えた。

そんな思考を断ち切るように、突然声をかけられた。

「日本語で雨のことを何と言いますか」

流暢とはいえないが、はつきり聞き取れる英語の質問である。

その声は、私のすぐ右横に座った五十歳前後の男からのもので、彼は半袖シャツに半ズボンという服装で搭乗してからずっと英字新聞のクロスワードに熱中しており、一心に考えてはボール

ペンで枅目を埋める作業に没頭していた。

「ああ、それは『あめ』と言います」

私は男の質問に日本語で答えた。

「『あめ』ですね、うん、うん。そうですね」

彼は英語で満足げに何度も頷いた。

どちらかといえば肥満体に属する彼の丸い体に乗った人懐っこい顔は、日本の街のそこにもここにもしやうなほど日本人的だった。私は彼が韓国か中国の人ではないかと思った。それを質すための言葉を搜していると再び彼が質問してきた。

「あなたは、日本人ですね」

「そうです、日本人ですよ」

私も英語で答えた。

「バリクパパンには何の用事で行くのですか」

「はい、バリクパパンにいる十五万トンのタンカーの船長として乗船するためです」

「その船は日本の船ですか」

「いいえ、パナマ船籍の船で、普通船員は皆インドネシア人です」

「ところで、差しつかえなければあなたの年齢をお知らせください」

「はい、六十一歳になりますよ」

私は男の訊ねる矢継ぎ早な質問にどみなく答えた。男の興味は六十歳を過ぎた私がたった一人で日本からインドネシアの船に乗りきたことに尽きるらしく、私の全身と顔を交互に見た。私は心の中で六十一歳にもなつて船に乗りたいたいと思う執念と、六十一歳でまだ現役の船長として働ける自負との二つの矛盾した気持ちをもてあましていた。

「六十一歳ですか、インドネシアでは六十一歳というのはもう老人のうちで、家の中でひっそりと過ごしますよ」

彼がそう言ったとき、スチュワードスが丸いお盆にミルクとパンを載せて搭乗客に配り始めた。彼はそれを食べてしまうとカバンからミカンに似た果物を取り出し、それを私の手に握らせて言った。

「これはインドネシアではジュルックという果物です。インドネシアにはドリアン、マンゴー、マンゴスチンといろいろな果物がありますが、旅行中に手軽に持って行けるのはこのジュルックだけです。小さくて嵩張^{かさば}らないからね」

私はそれを頂いてすぐ口に入れた。日本のミカンとそっくりだったが、意外に果汁が多い。それに小袋の中には思わず吐き出してしまうような大粒の種があつて、私の子供のころのミカンによく似ていると思った。その懐かしい味よりも、ほんの旅先で出会った彼の示してくれた旅の情

けのほうがありがたかった。

軽食を終えて再び小窓に顔を押しつけて海を見ると左下方に大きな島らしい岬が見えた。いよいよ、ボルネオ島の上に来たのだと思う。この島の北側はへばりつくような狭い幅でマレーシアの領土になっているので、地図には島の八分の七にも達する南側一帯にカリマンタンと書いてある。そしてカリマンタンの九五パーセントはジャングルである。

目を凝らして見つめるうち飛行機はそのジャングルの上を飛び始めた。高度が三千メートルしかないので私の目にもはっきりとジャングルが見える。それはすぐ下方に黒々と果てもなく続いていて、日本では絶対見ることでできない光景である。ジャングルがあまり深いのでじっと見ていると飛行機がその中に吸い込まれそうだった。

バリクパパンが近くなって下降を始めるのでシートベルトをつけるようスチュワーデスのアナウンスがあった。私はいま一度ふり向いて乗客を見た。四十人ほどのインドネシア人の仏像に似た虚無的な顔は飛び立つときと同じで、それぞれが黙々と腰のシートベルトをセットしている。映画でも見ているようだった。

私の右隣の男はスチュワーデスのアナウンスを耳にすると、慌てた動作で足元に置いたコードパンのトランクを頑丈な皮ベルトで十字に縛った後、真鍮製の錠前で施錠してから手早くシートベルトを着用した。

それから彼は、あらかじめ用意していたバンドエイドのような接着テープをポケットから取り出し、掌を自分のほうに向け手首付近にそれを張りつけようとしている。私は彼の不思議な動作をじっと見ている。彼は明らかにローレックスと分かる腕時計のバンド・グリップの上にそれを器用に張りつけたのだ。

私は彼の動作を見ながら、出発のとき東京の会社で聞いた言葉を思い出していた。

「カリマンタンには悪質の泥棒がいっぱいいるそうです。キャプテン、注意してくださいよ」

私は得体の知れない恐怖を隠して、笑顔で訊ねた。

「バリクパパンには、そんなに泥棒が多いのですか」

すると彼は、私の言を否定するように、ごく自然に答えた。

「私がこの時計をこうして保護したのは、ゴルフ・プレイをするときの脱落防止が目的です。ただそれだけです。けっして泥棒を意識したものではありません」

「しかし、トランクも随分嚴重にラッシングしてましたね」

重ねて彼の真意を探ろうとする私に、彼は肩を竦めて笑って見せた。

私は大変な所に行くのだと思った。私は少し緊張して、何か悪いことが起こらねばいいがと神に祈るような気持ちで目を閉じた。

☆

☆

☆

バリクパパンは南緯二度にあり、カリマンタン最大の港街である。しかし空港にはコンコースのような気のきいた設備はなく、狭くて短い滑走路を走って待合室に近い場所に止まると私たち乗客は飛行機の外に追い出された。赤道直下の太陽光線に照らされた私の頭は焼けるように暑くてちくちく痛み、全身からどっと汗が流れた。

私は右手にボストンバッグを持ち左の肩にショルダーバッグを吊るして空港待合室に向かって歩いた。私の右横の座席にいた男は、飛行機の側まで出迎えに来ていた車に乗る前、私に右手を上げて軽く頭を下げた。男が車に乗り込むと車はそのままUターンしてどこかに走り去った。

当然迎えに来ていなければならぬ代理店員は、どこを捜してもいなかった。代理店員がいなければ私はどうすればいいのかわからない。私は総計五個の荷物を持ったまま動きがとれず、強い不安に襲われた。そんな私の周囲をあっという間に七、八人の現地人が取り囲んでしまった。

彼らは口々に勝手なことを叫びながら鋭い目で私を睨んだ。ほんとは睨んではいけないのだろうが、私にはそう受け取れた。

私はしばらく代理店員を待つことに決めて周囲を素早く見回した。飛行場の建物としてはお粗末な古い木造平屋のロビーは待合室と呼ぶにふさわしく、セメントで固めた床もラワン材の天井も、実際に一列に並べてある木製の椅子も汚れた貧しいもので、日本ならば最果ての田舎の駅舎である。

七、八人の群衆は、私が両手でいくら追っ払っても逃げようとはせず、遠巻きに私を取り囲んでいる。彼らは二十七、八歳の男ばかりでパンツとランニングに草履ばきという恰好で、それぞれが何かを話しながら私との距離を四、五メートルに保ったまま動かない。

私は体の両側に荷物を置き、一番大切なボストンバッグを膝の上に抱えている。その中には会社から預かった船用金の二万ドルが入っている。日本円に換算すれば三百万円のお金である。私はこんな大金を持ち歩くのに不安を感じたが、会社の人の言葉を聞くとむげに断るわけにはいかなかった。

「インドネシアという国は、日本から何を送っても届かないのですよ。だから船用金など安心して送れませんのでキャプテンにお願いするしか方法がないのです」

日本では考えられないことである。しかしこの言葉が正しいと感じたのは、バリクパパン空港の長椅子に腰かけたときである。私には七、八人の現地人が皆、悪質な泥棒に見えた。少しでも油断すれば私の荷物など強奪されそうに思えたし、彼らが狙っているのは私の膝の上のボストンバッグの中の二万ドルの紙幣ではないかと思う。

けれども私はガルダ航空のガイドブックに書いてあるインドネシアの風物を半分は信じたいと思った。それには次のように書いてある。

「インドネシアの面積は日本の五倍で二百三万平方キロあり、島の大きさの順にカリマンタン、